

## 歯科衛生士学生のスマートフォン利用方法と依存状況

木 口 友 美

明倫短期大学 歯科衛生士学科

### Smart Phone Usage and Dependence of Dental Hygienist Students

Tomomi Kiguchi

Department of Dental Hygiene and Welfare, Meirin College

スマートフォンやタブレット端末などは近年爆発的に普及しており、現代の生活には無くてはならない必需品となっている。また、スマートデバイスの普及により、スマートフォン依存症やインターネット依存症も急増している。そこで今回は、歯科衛生士学科学生のスマートフォンの利用状況と依存の程度について調査を行った。歯科衛生士学科1～3年生の132名を対象とし、平成29年11月にスマートフォン利用状況について一部自記式多項目選択式質問紙法を行った。内容は、使用携帯電話の機種、携帯電話使用時間、利用内容、スマートフォン依存自覚度などである。また、スマートフォン依存自己評価スケールとしてWSDSを使用し、スマートフォンの依存度を計測した。回収率は100%で、未完全回答を除いた128名を調査対象とした。使用携帯電話は全員がスマートフォンを使用しており、フューチャーフォンを使用している者はいなかった。1日の使用時間では1・3年生では4時間以上5時間未満が最も多く、2年生では3時間以上4時間未満が最多であった。全学年においてLINEの使用率が100%であり、同画面上にメッセージ内容や既読の有無が表示されることや、スタンプが充実していることから、より普及していると考えられる。全学年においてスマートフォンに依存しているが23.3%、やや依存しているが52.7%と76.0%の学生がスマートフォンに依存していると自覚していた。WSDS得点は1年生で26.4±7.5点、2年生で23.4±9.1点、3年生で28.5±8.7点となった。今後は、アクティブラーニングの一環としてデジタル教材を使用しているが、スマートフォンの使用時間が長いことやスマートフォンへの依存を自覚している学生も多いことから、デジタル教材の使用方法も考えていく必要がある。

キーワード：スマートフォン、依存、歯科衛生士学生

Keywords: Smart Phone, Dependence, Dental Hygienist Student

### I. 緒 言

スマートフォンやタブレット端末などのスマートデバイスは近年爆発的に普及しており、いつでもどこでも持ち運びが可能で、現代の生活には無くてはならない必需品となっている。スマートフォンの個人普及率は平成21年で14.6%だったが、26年では56.8%と4倍以上に増えている<sup>1)</sup>。また、スマートデバイスの普及でスマートフォン依存症やインターネット依存症も急増しており、10～20代のネット依存的傾向が中程度もしくは高程度の者が68.3%と約7割が依存傾向であるとされている<sup>2)</sup>。

そこで今回は、歯科衛生士学科学生のスマートフォンの利用状況と依存の程度について調査を行った。

### II. 対象および方法

本学歯科衛生士学科1年生54名、2年生42名、3年生36名の計132名を対象とした。

方法は、平成29年11月にスマートフォン利用状況について一部自記式多項目選択式質問紙法を行った。内容は、使用携帯電話の機種、携帯電話使用時間、利用内容、スマートフォン依存自覚度などである。また、スマートフォン依存自己評価スケールとして和歌山スマートフォン尺度(Wakayama

Smartphone Dependence Scale: WSDS) を使用し、スマートフォンの依存度を計測した。

### Ⅲ. 結果

回収率は100%で、未完全回答を除いた128名（1年生50名，2年生42名，3年生36名）を調査対象とした。

#### 1. 使用携帯電話

iPhone使用者が1年生94.0%（47名），2年生76.2%（32名），3年生94.4%（34名）となり，Android使用者が1年生6.0%（3名），2年生23.8%（10名），3年生5.6%（2名）であった。また，フューチャーフォンを使用している者はいなかった。

#### 2. 携帯電話使用時間

1日の使用時間は，1年生では4時間以上5時間未満が最も多く36.0%（18名），次いで3時間以上4時間未満と2時間以上3時間未満がそれぞれ22.0%（11名）で1時間未満の者はいなかった。2年生では，3時間以上4時間未満33.3%（14名）で最も多く，次いで，4時間以上5時間未満と2時間以上3時間未満がそれぞれ23.8%（10名）であった。3年生では4時間以上5時間未満が最も多く30.6%（11名），2時間以上3時間未満が27.8%（10名），5時間以上が22.2%（8名）と続いた。また，1日中使用していると回答した者もいた。

### 3. 携帯電話利用内容

1年生ではLINEが100%（50名）と最も多かった。次いで調べもの・情報収集と電話（無料通話含む）がそれぞれ94.0%（47名）であった。2年生で最も多かったのはLINEで100%（42名），調べもの・情報収集が95.2%（40名），写真撮影が92.9%（39名）と続いた。また，3年生ではLINEが100%（36名）と最も多く，電話（無料通話含む）が91.7%（33名），写真撮影が88.9%（32名）となった。全学年においてLINEの利用率が100%であった。その他の結果は図1に示す通りである。

#### 4. スマートフォン依存自覚度

全学年においてスマートフォンに“依存している”が23.3%，“やや依存している”が52.7%と76.0%の学生がスマートフォンに依存していると自覚していた。各学年の依存自覚度の結果は図2に示す通りである。

#### 5. スマートフォンの依存度

和歌山スマートフォン尺度得点は1年生が26.4±7.5点，2年生が23.4±9.1点，3年生が28.5±8.7点であった。

### Ⅳ. 考察

#### 1. 使用携帯電話

メールや電話の機能だけを使用するのであれば、

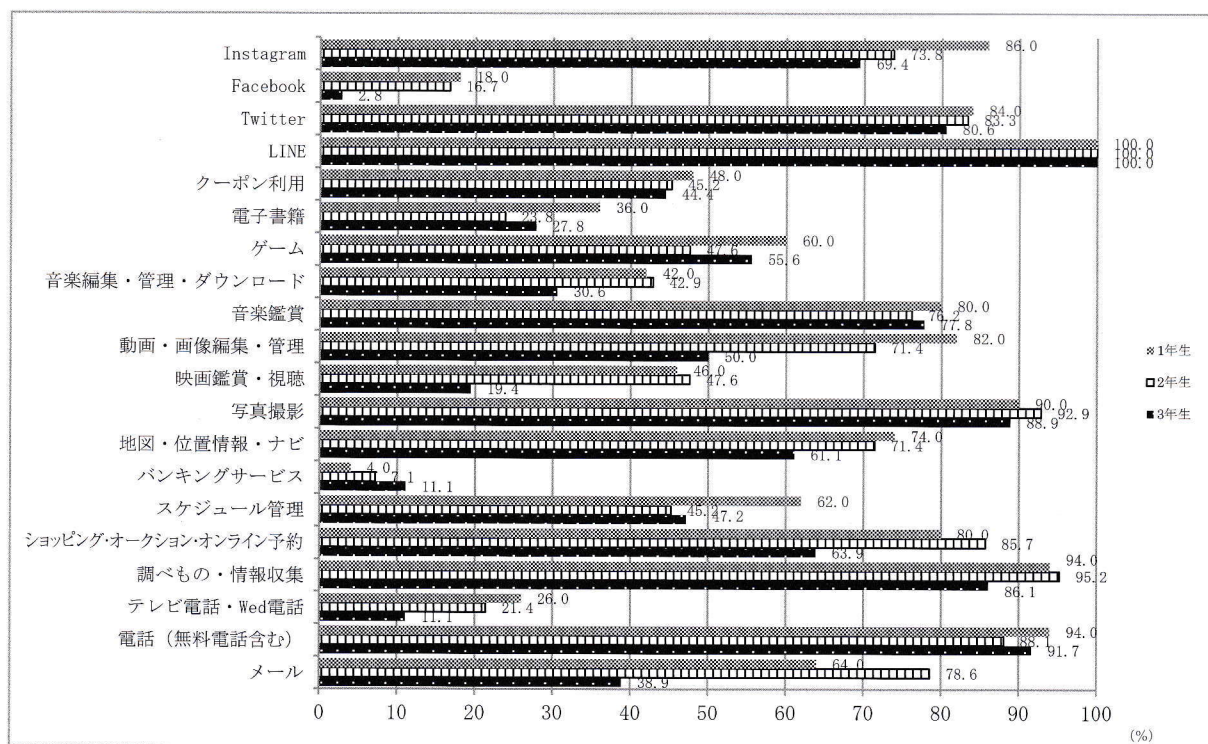


図1 携帯電話利用内容

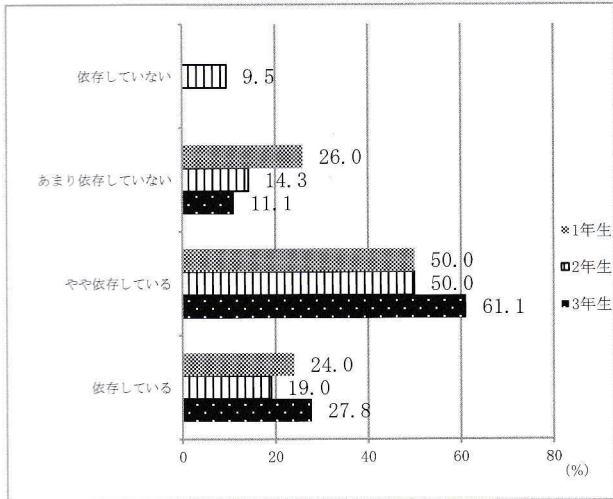


図2 スマートフォン依存自覚度

フューチャーフォンで問題はなかったが、近年のスマートフォンはボタン式ではなく直接画面に触れて操作が可能になり、便利で使いやすく、持ち運びが容易になっている。それに加え、年々スマートフォンの機能が向上しており、インターネットとの接続はもちろんのこと、アプリケーションではTVアニメーションや昔からあるゲームなどとコラボレーションしており、現代の若者だけではなく既卒で入学してきた者でも使いやすくなっていると考えられる。また、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（以下：SNS）も年々進化しており、フューチャーフォンでは使えない機能が利用できるため、今回質問紙調査を行った全員がスマートフォンを使用していたと思われる。

## 2. 携帯電話使用時間

講義が終了し、帰宅後、夕食やお風呂の時間を除き、就寝するまでの時間が4～5時間程度であることから、その時間に使用していると思われる。また、1日中使用している者は、起床後、講義間やお昼の休み時間等、空き時間があれば常備している携帯電話を使っていると考えられる。

## 3. 携帯電話利用内容

LINEとは、メールの代わりとして近年使用されているSNSである。全学年でLINEの利用率が100%であったのは、同画面上にメッセージのやり取りの内容や、既読の有無が表示されること、スタンプが充実していることから、より普及していると考えられる。また、電話番号がわからずとも通信料のみで通話ができることもLINEが利用率100%だった理由と思われる。また、2017ユーキャン新語・流行語年間大賞に受賞した“インスタ映え”のルーツとなっ

たInstagramやTwitterの利用率は全学年80%以上であり、高画質な写真撮影が可能であるスマートフォンならではのSNSアプリケーションの利用が多いと考えられる。それに比べFacebookは実名で登録することや中高年の利用者が多いため、学生の利用率は20%以下だったと思われる。

## 4. スマートフォン依存自覚度

スマートフォン依存の自覚度は、“該当する”と“やや該当する”が全体で75%であった。学生の4人に3人は自分がスマートフォンに依存していると自覚していた。これは、スマートフォンが普及し、通学時間などの少しの時間でもゲームやSNSなどが手軽にでき、スマートフォンがなくてはならないものであるからだと考えられる。

## 5. スマートフォンの依存度

和歌山スマートフォン尺度得点は2年生が最も低かった。これは、本調査を行ったのが11月であり、2年生は10月より臨地・臨床実習が開始し、始まったばかりで慣れておらず、実習の予習・復習などを行っていたため、最も得点が低かったと思われる。それに比べ3年生は、9月で臨地・臨床実習が終了し、時間や気持ちに余裕が出来たため、得点が高かったと考えられる。

今後の課題として、現在、アクティブラーニングの一環としてデジタル教材を使用しているが、スマートフォンの使用時間が長いことやスマートフォン依存を自覚している学生も多いことから、デジタル教材の使用方法も考えていく必要がある。また、スマートフォンだけではなく、インターネットの利用状況や依存の程度についても調査を行っていきたい。それに加え、スマートフォン依存症・インターネット依存症について、個人情報の取り扱いについても学生に再教育が必要であると考えられる。

## V. 結論

全学年において、スマートフォンを使用している者が100%で、フューチャーフォンを使用している者はいなかった。スマートフォン利用内容では、全学生がLINEアプリケーションを使用していた。全学生の約7割はスマートフォンに依存していると自覚していた。

本発表に関連して、開示すべきCOI関係にある企業などはない。

## 文 献

- 1) 総務省：情報通信白書平成29年版, 2017  
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/html/nc111110.html> (平成
- 2) 総務省：情報通信白書平成26年版, 2014  
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h26/html/nc143110.html> (平成

29年11月21日アクセス)

29年11月27日アクセス)